

平成24年度教職大学院派遣研修研究報告書

派遣者番号	管24K02	氏名	鎌田 悦子
研究主題 —副主題—	「学びの質」に着目した授業研究 —「こだわり」と「つながり」による「追究する力」の育成—		
所属校	板橋区立金沢小学校	派遣先	創価大学教職大学院

項目	内容
I 研究の目的	<p>学校において日々気になっている子供たちの姿に「学習意欲の二極化」と「人とつながる力の低下」が見られる。未来を担う教育が、子供たちの学ぶ意欲とともに、人間関係力の育成も行っていかなければならないと日々痛感するところである。</p> <p>国立教育政策研究所の平成18年度の研究報告書の冒頭で「学力向上の前に児童生徒の学習意欲の喚起のほうが先決問題である。児童生徒がその気にならなければ、結局学力は定着しないからである」と述べている。</p> <p>しかし、ベネッセ教育研究開発センターの「第5回学習指導調査」の結果からは、意欲や学びの楽しさより、強制してでも学習を重視させると答えた教師が増えてきていることが分かった。</p> <p>一方、学力世界一を誇るフィンランドの著書『「学力世界一」がもたらすもの』の中では「落ちこぼれを作らないために、学習の仕方は人それぞれ違うことを踏まえ、様々なアプローチの仕方を考慮する柔軟性が必要。」と述べられている。(実地研究をしたA小学校でもその必要性が認識できた。)</p> <p>子供の学びを統制的に行う方向に意識が流れている日本の教育と、子供の学習の仕方の違いを重視するフィンランドの教育。両者の間には、ますます大きな差が生まれるのではないだろうか。</p> <p>そこで、本研究では、子供が「学ぶ意味」を感じ、意欲的に学んでいける授業について考えていくこととした。</p> <p>本研究の目的は子供に本当の学びを与えるための、教師の取組を明らかにしていくものである。</p>
II 研究の方法	<p><b>1) 文献研究</b></p> <p>フィンランドのヘイノネンが語る「平等」「学びの質」について詳しく探るため、フィンランドの教育政策の意義や信念について文献を通して探った。また、日本の現状に合わせてフィンランドの教育政策を把握するため、子供たちの学びを大切にしながら優れた教育実践を行っているA小学校の研究報告書についても研究し、フィンランドの教育政策とA小学校の実践の共通点を探った。その結果、聴き合いの重要性に示唆を得て、その実証研究に取り組んだ。</p> <p><b>2) 授業実証研究 I 「聴き合いの時間」の実践</b></p> <p>東京都内の公立B小学校の5年生の学級で朝の会の15分を使って実施した。A小学校が子供の「こだわり」「追究する力」を育むために取り組んでいる「くらしのたしかめ」という実践を実際にやってみることで、その効果を検証した。また、「こだわり」「つながり」「追究」の関係性についても検証した。</p> <p><b>3) 授業実証研究 II 「5年 社会科 情報とわたしたちのくらし」の実践</b></p> <p>授業実証研究 I で「聴き合いの時間」の実践に取り組んだ学級で授業研究を行った。目的は「聴き合いの時間」の実証研究でみえたことが、授業の中でどのような効果を上げるのか、また、授業を行う上でさらに大事な要素は何かを検証することである。</p> <p>具体的には社会科情報単元の学習問題を設定するまでの2時間の実践に取り組んだ。授業を行う際は、「聴く」という学習スタイルと「こだわりをもつ」という活動を中心に置き、授業実証研究 I でみえた「追究の過程」に沿って授業を組み立て、子供の反応からその効果を検証した。</p>

<p>III 研究の結果</p>	<p><b>1) 文献研究の結果</b>  「学びの質」とは「教育を通してどんな人間を育てていきたいのか」という教育理念のことである。フィンランドでは「自分の価値を知り、他者の価値を知り、コミュニケーションを大切にしたい互いを思いやる人を育てる」という教育理念を「学びの質」と考えている。A小学校は「自ら求めていき、自分の力で物事を切り開いていく人。自己更新していきける人を育てる。」という教育理念を「学びの質」としている。</p> <p>さらに、両者が以上のような教育理念を達成するため、大切にしていることの中に共通したカテゴリーがあることがみえてきた。それは、「こだわり」「つながり」「追究する力」の3つである。「こだわり」「つながり」「追究する力」こそ、教育活動の中で子供たちに大切に育んでいくべき重要事項であることが分かった。そのことから考えると、教育における「平等観」の大きな変換が必要であることも分かった。変換とは「子供一人一人に同じ知識や力を身につけさせる」平等観から、「一人一人の違いを大事にする」平等観への変換である。教育界の中に、目先の知識を全員に与えようとするあまり、一方的な教授にとられ、子供の状況を軽視してしまう傾向があるのではないかと。</p> <p>しかし、ヘイノネンが言っていた「平等」とは一人一人の違いを最大に生かした上で、自身の生き方を追究させていくという意味の平等であり、本当に子供一人一人に温かい眼差しを注いでいくという意味の平等観であった。</p> <p>また、更新した平等観のもと、授業を考えていった時、「聴き合い」という活動が重要な活動になってくることも分かった。</p> <p><b>2) 授業実証研究Ⅰ「聴き合いの時間」の実践の結果</b>  「聴く」とは、相手の思いや考えを聴き、その思いや考えの意味、よりどころなど、相手の全てを知っていきこうとすることであり、心で聴くことである。</p> <p>「聞く」という活動は学校現場に非常に多いが、自分と比較して聞こうと指示する活動は、相手の意見を外野から聞くことになり、相手を疎外する場合は相手を理解しなくなることにつながるため、「聴く」とは全く異なる活動となる。「聴き合いの時間」の効果としては①「こだわり」をもつ基礎作りになること、②「こだわり」が「つながり」を生むこと、③追究の過程が明確になったことである。</p> <p><b>3) 授業実証研究Ⅱ「5年社会科」の実践結果</b>  重松鷹康は、授業を山場に導く指導技術について以下の三つのすじみちを紹介している。①個々の子供に、その子なりの問題をもたせる、②つかんだ問題に対して見直させる、③問題をお互いに関連付けさせ、共同問題にしぼらせるというものである。この筋道から考えても、「こだわり」をもって追究させるためには、「一人一人の思いの違い」を題材にし、子供の「こだわり」を発揮させる場を設定していくことに徹していかなければならないことが分かった。</p>
<p>IV 考察</p>	<p>子供の「こだわり」を大事にし、「聴き合うこと」を学びの中心におくことは子供に「友達とのつながり」、「追究する力」を育む上でとても効果がある。また、「こだわり」、「つながり」から「追究」が始まる学びを進めていくためには、従来の指導観、授業観を大きく転換していく必要がある。</p> <p>そこで、子供の側から教育を見直し、「聴き合い」を根本に置いた「一人一人が育つ学校カリキュラム」を工夫していくことが今後の課題である。その際は、聴き合い学習には不向きなドリル学習のような内容と、総合的な学習の時間のようによく合う内容とがある。「聴き合い学習」をどの単元で、どのように取り入れるか、どの内容で取り入れるのかということを実証しながら研究を進めていく必要がある。</p>